

武蔵野日曜集会

変貌の山

——マルコ伝第9章2～13節——

1965年1月17日

小池辰雄

感激の音信 象徴の世界 終末的永遠的現実の音信 「エン・テオー」「エン・クリスト」 モーセとエリヤ 光雲光露 エホバの僕 復活の生命 エンテレケイア メタモルフォーゼ ウル・フェノメノン 体感する世界 幕屋の現実 何がどうなってもいいよ ウル・レリギオン 撰人 爆発力

【マルコ9:2～13】

2 六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。斯て彼らの前にて其の状かわり、³ 其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も為し得ぬほど白し。⁴ エリヤ、モーセともに彼らに現れて、イエスと語りいたり。⁵ ペテロ差出でてイエスに言う『ラビ、我らの此処に居るは善し。われら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』⁶ 彼等いたく懼れたれば、ペテロ何を言うべきかを知らざりしなり。⁷ 斯て雲おこり、彼らを覆う。雲より声出づ『これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聴け』⁸ 弟子たち急ぎ見回すに、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。⁹ 山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦えるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給う。¹⁰ 彼ら此の言を心にとめ『死人の中より甦える』とは、如何なる事ぞと互いに論じ合う。¹¹ 斯てイエスに問いて言う『学者たちは、何故エリヤまず来るべしと言うか』¹² イエス言い給う『実にエリヤ先ず来りて、万の事をあらたむ。然らば人の子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の録されたるは何ぞや。』¹³ されど我なんじらに告ぐ、エリヤは既に来れり。然るに彼に就きて録されたる如く、人々心のままに之を待えり』

●感激の音信

驚くべき現実です。さきほど、N君が

「毎日、驚きをもつて生きている」

と言われましたが、今の若い方々は、どうも驚嘆すること——驚くということ、感激ですね、



感激性——感激がだいぶ乏しいのではないかと思う。まあ一面は、大いに歌ったり踊ったりします。あれがその感激というんだか何だか知りませんが。しかし、心の本当の感激というものをと持たなくては、生命の世界には入れない。生命の世界は必ずこの感激——よころびおとずれの感激ですが——を伴っています。ですので、福音は「福の音信」という。これは感激の音信なんです。

福音書というのは、どの頁をみましても、全く驚嘆すべき現実である。どうか、皆さんも、それにぶつかって、すぐそれを理屈で

「どうだ、こうだ」

と考えたり疑ってみたりするのではなく、驚き感激することが大事です。疑ったって、それはいいですけどもね。

「真理は先ず疑いから始まる」

という。しかし、疑うなら、自分の理性や感情や意志を、自分の側を疑った方がいい。神さまの側、神さまの現実、キリストの現実を疑ったって、どうにもならん。それを疑うということは、実は自分の現実がおかしいという、逆のことなんです。本当の現実に入ると、

「それが本当の世界だ」

ということが分かります。

「この福音の世界に入ったら、もう後戻りなんかできません。とても楽しい世界ですよ。もう大丈夫です」

と、私はさつきも道を歩きながら、或る方に申し上げましたが。そういうわけです。そういうのが、我々の福音の世界です。

●象徴の世界

今日のマルコ伝9章の2節から13節というところは素晴らしいところです。あんまりけたが違ふものだから、

「まあ、そんなことはキリストだから、あつたかも知れない」

くらいなところで、普通は済ますけれども。それではいけない。どんな聖書の素晴らしい現実でも、我々の現実にみな非常に重要な関係をもっている。決してよそごとではない。今日は、そういうようになつてくださいますよ。

こういう世界は、言おうとして言えない。これは説明がつかないんです。だから、キリストも、仕方がないから、

「私は葡萄の木で、お前たちは枝だ」

なんて、そういう譬えみたいなの、みな象徴的な言い方をされる。すべて本当の真理の世界は象徴的なんです。ゲーテも晩年に至って、彼の詩の世界も完全に象徴の世界に入った。『ファウスト』の第二部なんてのは完全にそうです。ダンテもそうです。まだ概念でものが言



われるうちは大したことはない。それがたとえ、観念的な言葉を使いましても、その言葉の奥からの本当の迫りをもつていれば、或る力は持ちます。けれども、それはみんな本当の意味においては、象徴で言うよりか仕方がない。だから、「光」だとか、いろいろな言い方をするわけです。

●終末的永遠的現実の音信

2 六日の後、

いよいよ、キリストも大事な彼の終末の音信を、終末的永遠的現実の音信を、今度は身をもつて現された。大体これは、ヘルモン山の近所でしょう。高い山ですからね、ヘルモン山脈に連なつたどれかかと思ひます。ヘルモン山というのは海拔一万フィートある。四時雪をいただいている。私はガリラヤ湖上からヘルモン山を遙かに見まして、ああ素晴らしいなあと思つた。雪の山です。湖畔は上衣を脱がなくてはすまないくらいに暑いけれども。

イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、

この三人はキリストの一番弟子みたい人たちですが、この三人だけを連れて行つた。非常な現実であるものですから、ごく緊密なご連中のたつた三人だけを連れて行つた。

人を避けて高き山に登りたもう。

さきほど、「断絶」というお話がありました、まさに塵寰から断絶したわけだ。私は昔の人だから、少し難しい字を書きます。「塵寰」というのは、塵の世界、市井の巷、人里です。人里から離れまして、そして、雪をいただくような高き山に登る。

斯て彼らの前にて其の状かわり、

山氣、山の靈氣が、山嶺の氣が満ちているわけだな。しかし、キリストの靈的現実、この山嶺の氣をまた超えたところの素晴らしい——私はこうやって外を見ようとしても、窓が閉まつているのでおもしろくないけれどもね、私は青空を見るのが好きなんだ——その山嶺の氣が満ちているよりも更に高次な、靈界の中に自分を本当に入れておられる。

●「エン・テオー」「エン・クリスト」

これが

「エン・テオー」(神の中に)

で、神のうちにいる。

「エン・テオス」(神の中)

です。ドイツ語で「エントフジアスムス」(Enthusiasmus 靈感、恍惚、有頂天)という言葉があるでしょ。有頂天的な恍惚の状態のことを「エントフジアスムス」という。これは「エン・テオス」なんです。神のうちにいる。内神という言葉はないけれども、入神の状態です。入神状況のことを「エントフジアスムス」という。有頂天、恍惚の状態ということは何か



というと、

「神の中^{うち}にある」

ということですよ。

キリストはいきなり神の中にありましたけれども、私たちはいきなり神のうちにあることは、それはいわゆる直接的な神秘主義になりますから、危険ですよ。そこはどこまでも「キリストの中に」「エン・クリスト」

でないといかん。「キリストの中に」ということです。キリストは我々の罪の贖い主ですから、この自我というやつがのさばるところの罪びとを贖ってくださった方です。それだから、キリストの中には、これはもう遠慮なく入ることができる。

キリストは即ち「アントフジアスミス」（入神）、「エン・テオー」神の中に入った。だから、その様が変わったんです。

3 其^その衣^{はなは}かがやきて甚^{はなは}だ白くなりぬ、世^{ぬの}の晒^{さら}布^ふ者^{もの}も為^なし得^えぬほど白し。

なぜ、そんなに白いのか。雪も凄く白い。もしここで例えるならば雪ですよ。けれども、「雪よりも白く」という言葉がイザヤ書の中にある。

「エホバいいたまわく、いざわれらともに論^{あげつ}らわん。なんじらの罪は緋^ひのごとくなるも雪のごとく白くなり、紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん」（イザヤ1・18）

「汝らの罪は緋^ひの如く赤くとも、雪よりも白くされる」

と、イザヤ書1章の終りの方に書いてある。キリストもこの変貌の状態では、雪よりも白く、白光を放っている。白光を放った状態になりますから、もう衣まで浸透してしまっているわけです。全部、光で覆われてしまう。

今朝、テレビをちよつと見たら、運慶と快慶の合作であるという釈迦如来の仏像を映していた。その釈迦如来の後ろにやはり火が、炎が立っている。光輪がある。なかなか立派な像ですよ。しかし、キリストの場合はその釈迦如来以上の現実がここに現象している。

●モーセとエリヤ

4 エリヤ、モーセとともに彼らに現れて、イエスと語りいたり。

それを客観的にこの三人の者が見たわけだな。なにもキリストは降霊術を使ったのでも何でもなし。とにかく、「モーセとエリヤ」というと、旧約の最高の霊的な二人ですよ。

文書預言者たちは、預言の世界では素晴らしい世界に入っていますけれども、霊的な現象の凄さという面では——まあ、エゼキエルはちよつと凄いですが——モーセとエリヤはそういった霊的現象の面で非常に凄いところに入っている。モーセはあの出エジプトという驚くべきことを神の力でやらされた。モーセの如き預言者はもはや出てこないだろうというような言葉があるくらいです。ただ、エリヤがメシヤの先ぶれとして考えられている



から、

「あなたはエリヤだと人々は言っている」

という。今でもなお、エリヤが現れてきて、本当のメシヤ、世界に君臨するようなユダヤの王国を建てる者が、そういつたメシヤが来るということを、今でもなおユダヤ人は信じているんだからね。とにかく、そのモーセとエリヤが現れてしまって、語っておられる。

⁵ペテロ差出^{さしだ}でてイエスに言う『ラビ、我らの此処に居るは善し。』

「私たちのここに居るのは、まことにうれしい、よろしいことだ、いい時に出つくわしたものだ」

と。ペテロは例によつて、すぐこういうようなことを言いだした。

われら三つの廬^{いおり}を造り、

「幕屋」のことです。三つの幕屋を張つて、

一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』⁶彼等

いたく懼^{おそ}れたれば、ペテロ何を言うべきかを知らざりしなり。

もう全然新しい現実がそこに来たらから、ひとつここぞで、

「山の上でしばらくお宿りください」

というわけだな。非常に驚くべき現実で、魂がおそれている。ペテロは、何も言うことの見当がつかない。

●光雲光露

⁷斯^{かく}て雲おこり、彼ら^{おほ}を覆う。

この雲は霊的な雲です。「瑞雲たなびく」なんて言う。これはモーセの場合も、あの出エジプト記のところにも書いてある。即ち、

「昼は雲の柱、夜は火の柱」

とある。そして、

「モーセが神と語る時に、その営の外に雲が満つる」

というようなことが書いてある。そういった霊雲の現象が起きる。これも霊的な雲なんだ。霊氣的な風が起きたり、霊的な雲がそこに漂ったりする。イザヤ書26章19節に、

「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であつて、それを亡霊の国の上に降らされる

からである。」(イザヤ26・19)

「光の露」なんていう言葉がある。光露。これが今言った雲です。雲は即ち光の露の集団ですから。光雲の、光雲光露の集団です。イザヤという預言者は非常に霊的な預言者です。そういう亡霊の国の上に降らせるといふ。我々のこの亡霊みたいな国の上に降らせて、死者は生きるといふ。



イザヤ書25章8節に、

「主はとしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる」(イザヤ25・8)

と書いてある。

「としえに死を滅ぼして、その顔から涙をぬぐう」

というような言葉は黙示録の中にやはり相応じて出てきます。黙示録7章や21章にもでています。もう既にイザヤは、そういった死を滅ぼすような現実を預言しています。

死者の甦えり、復活ということ。即ち、キリストはやがて十字架にお架かりになって、必ず甦える。甦えった時はこのようであるぞということを、変貌の山で事実をもって証明されたわけです。

旧約でもうひとつ、はっきりとそういう死人の甦えりのことを言っているのは、ダニエル書12章2節のところにある。

「また地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。」

そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者

もあるでしょう」(ダニエル12・2)

と。永遠の生命に甦えるのでなくてはいけません。

その復活の生命。コリント前書15章に描かれているようなあの、パウロが徹底的に15章でもって復活のことを言った。また、パウロはその書簡の初めの方に、

「イエスを死人のうちより甦えらせ給いし大能の神」

ということをよく言っています。ロマ書1章4節にも書いてある。コリント前書13章は徹底的に愛を説いていますが、パウロは15章でこの甦えりの生命、霊的な生命を言っている。

復活の生命ということです。もしこれがなかったら、信仰は空しい。我々の本当の喜びもありはしない。喜びのおとずれとは、死んでも死なない生命の音信である。その生命は絶対に愛の生命である。ただ承らえているという生命ではない。愛なき生命は決して永遠ではないですよ。「永遠」ということは、永遠の質は何であるか。愛である。愛のないものは決して「永遠」という名に価しない。そういう愛の生命。死なざるものはただ愛のみである。そういう素晴らしい喜びのおとずれを具体的にこの変貌の山で彼はなされた。

●エホバの僕

7 斯て雲おこり、彼らを覆う。雲より声出づ『これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聴け』

これは我が愛子である、これは我が歓喜であると。これは詩篇第2篇、イザヤ書42章に出ている。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあた



えたり。かれ異邦人ことくにびとに道をしめすべし」(イザヤ42・1)

「これは我が愛しむ僕である。この上に私はわが霊を置いた」

と、エホバの神が第二イザヤにおとずれた。イザヤ書42章というのはいわゆる「エホバの僕の歌」の第一の歌です。その一番先にそれが出ているから非常に大事なわけです。イザヤ書42章の始めの方はもう有名な、聖書で一番大事なところの一つです。

「かれは叫ぶいことなく声をあぐることなくその声を街頭ちまたにきこえしめず。また傷める蘆あしをおることなく、ほのくらき燈火ともしびをけすことなく、真理まことをもて道をしめさん。」(イザヤ42・2～3)

という。非常に深いやわらかい愛のことが説いてある。そして、その人は、真理を地の極までたておわると書いてある。

「かれは衰えずして喪胆きおちせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言おしえをまちのぞむべし」(イザヤ42・4)

これが「エホバの僕」である。エホバの僕の歌はイザヤ書53章によつて極まるわけです。イザヤ書53章は旧約聖書のどん底である。また最高峰である。

即ち、十字架を負うところのエホバの僕が、本当に

「わが愛しむ子、わが歓ぶ者」

である。

●復活の生命

こないだ、「真生」というお話をしましたね。本当の生命。本当の生命は即ち、この世を棄てたその十字架の担い手です。「己を棄てる者」が本当に十字架が担えるんです。十字架の担いを担える者が本当の真生に生きるものである。決してその人は死なない。そういう、十字架の僕、砕けの僕が本当に

「わが愛しむ子、わが歓ぶ者」

であつて、神さまがこの「愛しみ歓ぶ者」をただではおかない。いかなる事態よりもつと素晴らしい事態をそこに必ず展開させる。これが即ち、キリストの変貌において現れているところの復活の生命です。復活の生命とは何ぞや。これは神の栄光体です。

弟子たちはこの時に、

「本当に私たちもそのように変わりたいなあ。この復活のキリストのように光の人

となりたいなあ」

という願望が起きていない。ただ懼れあわててしまっている。それではダメですよ。私たちが聖書に驚嘆するとは、

「ああ、素晴らしい」

と言つて、



「こっちはダメだ」

というんじゃないですよ。その素晴らしい世界、その世界にあずかりたいという願望が起きなかったら、その驚きは本当の驚きでない。それは驚きかも知れないけれども、本当の驚き、驚嘆は

「自分がそうになりたい。何とかして、それに与^{あず}かりたい」

と。この願望は神さまの栄光の世界ですから、直ちに――それから何年たつてから、何か月たつてからではない――直ちに、即刻に、今ここにおいてその世界に入れる。

恵みは絶対でありまして、「絶対」というならば、時間的にも空間的にも条件はいらない。こちらの魂の状態だとか、そんなことは要らん。絶対と言えば、絶対なんです。「絶対」に条件をつけて、

「まだ、私はこうですから」

なんてやっているから、いつまでたつたつて、福音が入ってこない。単純にならなくては。バカ正直にならないと。バカ正直な人がどしどしその世界に入ってしまう。頭のいい人ほど、なかなか入れない。頭のいい人は自分の頭にたよるから。とにかく、有限的な自分というものに頼っているうちはダメです。

そういう素晴らしいものになる。神さまが私たちの中に住まわせた霊を

「妬むほどに慕い給う」

という。

「その霊を本当に自分と同じ世界に入れてやろう、同じ質にしてやろう」というのが、神さまの慕い求めです。

●エンテレケイア

ライプニッツが「モノドロギー」(单子論)というものを書きました。アリストテレスが「エンテレケイア」ということを言いました。ギリシヤ語です。これは「エンテロス・エケイン」という、「充滿して持つている」という意味です。その中に充滿しているところの何ものか。そういった我々の霊というものは、私が言うところの霊子だね――魂のひとつの原子というもの。物理の世界で原子というものを考えるでしょ――霊的な世界で、この霊子という言葉を私は使っておりますが、それが即ち、神の生命を、神的な生命を充滿して持つているときに、本当にそれが生きています。この「エンテレケイア」が――そういった霊的なひとつの霊核とか霊子とでもいますか――それが神さまの生命を実は受けている。本来、神の子である。パウロが、

「もし、聖霊を受けたならば、『アバ父よ』と言うことができる」

と言った。自分の中に本当に神の子の質が出てきます。この霊子に神の霊が入ってくれる。キリストの霊を受けますと、これが本当の生命になる。そして、ここに変貌が起きるわけ



です。霊の姿が変わっている。

●メタモルフオーゼ

ロマ書12章2節に、

「又この世に倣^{なら}うな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを弁^わえ知^まらんために心を更^かえて新たせよ」(ロマ12・2)

「心を変えて」とある。「メタモルフエイン」という字です。心に「メタモルフオーゼ」(変質、変貌、変態)を起こす。この「メタモルフオーゼ」というのもゲーテが好きな言葉です。ドイツ語でいうと、「エンテレケイア」は「エンテレキー」ですが、この「エンテレキー」だとか「メタモルフオーゼ」という言葉を非常に彼はよく使っております。

それから、すべて「ウル」(元、原、源)の事態を非常に彼は尊んだわけです。彼が本当に福音の世界に入ったならば、もう「ウル・エバンゲリウム」(原始の福音)で確かにやったと思うんですが、その点だけは誠に惜しいけれどもね。

「メタモルフオーゼ」は、変貌、形を変えることです。「アントロポモルフオーゼ」なんていう言葉もあります。「人間化する」という言葉です。キリストは即ち、イエスということに人間化してきた。これが「受肉」ですけれども。今度はいいよ、神の姿に――私たちでいえば、キリストの姿に――変貌しまた変貌していく。即ち、回心、心をめぐらすということが本当に具体的であらんがためには、この変貌をしなければならない。変貌の「貌」の字は「すがた」という字ですけれども、もちろん、その内的なすがたです。内的な姿が、霊の姿が変わるわけです。

「回心せよ」

ということは、自分がそこに碎かれて、キリストの霊がそこに入ってきたときに、本当にそれが「悔改め」になる。人間はいくら自分で悔改めたって、それはある程度の一時的なものです。本当の悔改めというものは、キリストの霊のバプテスマ、聖霊のバプテスマにおいて本当の回心が起きる。「水のバプテスマ」というのは前段階、序曲だ。「水」というのは、なにもただ形式をいつているのではない。即ち、

「自分というものはとにかく悪かった。自分というものはどうにもなりません」

と。「どうにもなりません」と言って投げ出すことが、それが水のバプテスマのところだ。その「どうにもなりません」と言って投げ出した、その自分というものが実はキリストの十字架において投げ出されていた、ということです。

「キリストの十字架において自分は十字架されていた。キリストが既に自分の代わりに十字架してくださった。自分というものはもうすつ飛んでいる。もう、現在の私がどうであるかであるなんてことは問題ではない。もう、救いは既に、贖いは完了している」



と。これをバカ正直に本当に受けとっていく。そうしたらば、

「わが霊を受けよ。空っぽで空き巣にはしておかないぞ。私の霊を受けろ」

「はいっ」

と言つて、この祈りの世界でキリストを受けとるときに、この聖霊のバプテスマに、そこで本当の回心になる。変貌が起きるんです。キリストの聖霊が入ってくる。これが変貌です。私たちは日々はこの変貌を起こしていかなければダメです。メタモルフォーゼをしていく。

●ウル・フェノメノン

ゲートの『エッカーマンとの対話』という本があります。とにかく、ゲートという人は非常にいろんな真理が分かる人です。訳本もありますから、一遍読んでごらん下さい。生命の現象に対する非常に深い感覚をもっている人ですから。

「地上のいろんな存在の永遠のメタモルフォーゼ、変貌というものは、あるものが生まれ出づること、それがどんどん成りまた成っていく——生成ですね——それから、あるものが碎け破壊されまた、それが再び形成される。そういうたようなことでもって、いろんなものが展開また展開していく。そして、我々はいかに、霊的な源泉、ある神的なもの——それに対してはもはや私たちの概念も表現もどうにもならない——そういったものを私たちはただ象徴的にしか言つことができないが、そういった源泉というものの神的なものがメタモルフォーゼの、いろんな変貌の元になっている。」

と言っている。信仰でものを言っているのではないけれども、ゲートは確かにそういうこととの洞察のきく人でありました。もちろん、彼は聖書をよく読んでいますから、それも参考にはなっているでしょうけれども。

私たちのクリスチャンの生活に何か質の違った力、生命、実質をもつためには、この聖霊におけるところの変貌を日々^{あらた}に新たに起こしていくことです。

「うちなる人は日々^{あらた}に新たななり」

とパウロが言つたが、その「日々に新た」ということは、我々が日々^{あらた}にそのような変貌を起こしていく。日々^{あらた}に私たちは何かを見たり、何かを聞いたり、何かをやったり、何かを読んだりしているうちに、その福音の事態をキリストにおいて受けとっていくと、それがみんな活かされていく。そして、自分が本当にそこで知らないまに変貌させられていく。そういう体験の仕方をしていかなかったならば、本当の生き生きとした歓びの、どんなことがあつても行き詰まらないような人になれないですよ。

その意味において、私たちはこのキリストの変貌の事態を読みますと、

「本当に自分もこのように変わりたいなあ」

と思う。いや実に、外側はイエスほどに輝くわけにはまいりませんが、イエスでも特別な現象としてここに現象されたわけですけども、いわゆる外側の現象として見えな



くても、内なる現象として根源現象として——「ウル・フェノメノン」という、これもグーテの好きな言葉です——「ウル・フェノメノン」「根源現象」として、我々の内に、わが存在のうちに於いてこれが変わっていく。確かに変わった。この福音を受けとっていけば、このキリストを文字通りに——「文字通り」というのはただ文字に執することではないですけれども、いや「文字通り」どころではない、文字の奥の不立文字だ——文字の奥の世界を本当に私たちが受けとっていく。聖書の奥の世界です。

●体感する世界

普通は、聖書を読んで、何のかのと解釈しているでしょ。ダメですよ。眼光紙背に徹するというのが、実は聖書の文字はまだひとつの象徴だから、その奥の世界に入らなくては、文字も象徴ですよ、聖書の文字も。その奥の世界に本当に入って、受けとって、

「はい、そうだ」

ということにならなくては。キリストは、

「聴く耳あるものは聴くべし。見る目あるものは見るべし」

と仰るが、その奥の世界を本当に見、本当に聴き、本当に身に触れ、体感する。身体に感じていなければ。本当に体感する世界に入ってくると、この変貌が起きつつある。皆さんの中に本当に光が灯っていく。また、本当に永遠の生命が躍動しつつある。それが自由自在に現れる。いわゆる霊的現象として現れなくても、実存の上に現れてくる。それが大事なんです、その実存の上に現れることが。

絵を描く人は絵を描くうえに、そろばん算盤をはじく人は算盤をはじくうえに、ピアノを弾く人はピアノのうえに現れる。いつか、キリスト新聞に出ていたな。ピアノがどうしても上達しない。随分練習するけれども、あるところまでいくがダメで、手の指の病気になって、しばらく休んでいた。しかし、この祈りの世界を深く受けとって、そして新しく弾き出したら、えらいことになったという話です。そういうことが実証されていく。これはみんな、いわゆる観念信仰ではダメです。

とにかく、それが何となく自分に感ぜられてきたら、もう、この福音から去るわけにはいかんですよ。集会にやって来れば、日曜の半日を集会したら、後の半日は一日以上の力が出てくる。いわゆる時限というものに制限されているような人間ではダメです。時限に対して逆比例して、質をもつていくような人にならなくてはね。

だから、私みたいに夜の12時なんか過ぎない方がいい。内村先生は必ず10時になると寝てしまったそうだ。そして、人が来ても10時になると、

「君、帰りましたまへ」

と言う。そういうところは実におもしろい人ですね。まあ、それくらいがいいんです。短い時間にグッと集中してやる。もちろん、いろんな本を読むときには、相当の時間は要り



ますけれども、そんなことを言っていたらダメなんです。時間が短くなると、一体この本のどこを読んだらいいかと、スーッと見ているうちに、パツと出てくる(笑)。そういううなわけで、何も判字絵ではありませんが、大事なところの見当がつく。

S君のお母さんが深刻な病気になった。癌です。医者に見離されそうな事態になった。もう試験が近い時だけでも、出かけて行って、一生懸命で母さんのために祈って、按手してあげた。そしたら、明日は熱が何度になるか、みんな示されてしまつてその通りになる。そしてとうとう、お母さんは治ってしまった。お医者さんがびっくりした。

私は、お医者さんの術や医学や薬や、みな尊重いたします。けれども、こないだもちよつとテレビでやっていたけれども、鍼^{はり}なんていうのは凄い勘をもっている。いわゆる西洋科学的な証明ができないからといって、すぐ疑うことはいかん。西洋の医学でも科学でもおおいにいいさ。しかし、東洋にはまた東洋のいいものがあるんだ。そこにはちゃんと経験のうえから一つの法則をつかんでいるわけです。あてずっぽうでも占いでも何でもない。経験のうえからつかまれた法則というものが科学的に証明されなければどうのこうのと考えるのは、それは科学過信である。科学もひとつの限界をもっている。一体、「科学」なんていう言葉で言う必要はない。人間のなすことはすべて大きな意味で「科学」と言つたつて構わない。とにかく、すべて本当の法則が見えてこなくてはいいかん。科学の世界にも法則がある。そういう鍼^{はり}の世界にも法則がある。善きものはどしどし善用していく。何でもそのようにして、本当の法則をこの生命の世界から捕まえていくことです。

医学術いろいろ結構です。大いに私は尊重しますが、しかし、この霊的な生命を、生命の中の生命を与えるものは、人間のどんな学問でもどんな術でもない。これは神・キリストの他にない。

●幕屋の現実

ペテロが

「三つの庵^{いおり}を建てる」

と言った。ところで、今言つたように、キリストの中に私たちが変貌せしめられて入っていく。そういう現実、その現実自身が即ち幕屋の現実です。何もペテロがそこで幕屋を張らなくても、我々がキリストをそのようにして迎え、キリストの中に在るときに、個人としても、また二、三人でいようと、こうやって大勢でいまいしょうとも、それは即ちキリストとの本当の「出会いの幕屋」の中に——旧約聖書にこの「出会いの幕屋」という言葉があります——正に、出会いの幕屋の中に入っているとこの幕屋の状態です。

「神の幕屋、人と共にあり。人、神と共にあり」

という、ヨハネ黙示録の21章に出てくるところの「幕屋」の状態です。そこに入るわけですね。



「我また新しき天と新しき地とを見たり。……また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人の民となり、神みづから人と偕に在^{いま}して、かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん、今よりのち死もなく、悲歎^{かなしみ}も、号叫^{さけび}も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』」（黙示録21・1～4）

という。一切の悩みも悲痛も全部すつ飛んでいつてしまふ。今、行き詰まりの事態。今、分裂の事態。今、悲しみの事態。今、困窮の事態。今、失敗の事態。皆さんはいろんな事態をもっているわけです。皆それぞれ何か事態をもっている。皆それぞれ問題があるでしょう、何か。その「今、何々」というその不如意な事態を、いついかなる時も必ず突破しなければいかん。突破しなければいかんと言うけれども、突破できるんです。それは、今言ったその変貌、メタモルフォーゼを、内側に聖霊を迎えて——キリストが神さまを迎えて変貌したように——イエス・キリストを迎えて、聖霊を迎えて変貌すれば、その事態に必ず打ち勝つ。

地上の一切のものは条件的なものです。有限的なものです。けれども、神的なこの現実は無条件にして無限なるものである。それが今、私たちの中で必ず勝てます。勝つ。だから、福音なんです。そうでなかったら、福音ではない。

「もう少し待つてから。もう少し聖書を勉強してから。もう少し修養してから」なんていうのだったら、本当の福音ではない。それはみんな条件がついている。絶対無条件と申し上げているのはそのことです。絶対無条件と、私は観念で言っているのではない。私は本当に現実をもつて言っているんです。

●何がどうなってもいいよ

こないだ、千葉伝道に行つて、車の中で

「私は^{たお}仆れても、うちの子どもたちが何人いて、どうであつても、もう私は悔いはない」

とT君が言つたけれども、それが本当に無条件の世界なんです。そこに来なければ、そういったところに生きていなければ、力はないんです。そして、神さまはそれを決して捨てない。

私たちは絶対無条件の、

「この生命をいかにせん、この歡びをいかにせん、キリストの勝利をいかにせん」

と、それは即ち本当に栄光体とその人がなっているわけです。その人の奥には神さまの栄光が起きている。キリストの栄光体とその中核においてされている。皆さん一人びとりが、キリスト者とはそのような栄光体である。驚きが現実となつて、自分が驚くべき人になつている。自分が驚くべき人に自然になつている。



「だから行くぞ、だから大丈夫だ」

と。どんなに未完成で終わっても、その勝利は、完成は来ている。未完成の完成が――「未完成交響楽」という――そのところに私たちは来ているから、本当の平安と無限の希望をもつと同時に、

「何がどうなってもいいよ」

という、捨鉢みたいな言葉ですけれども、本当にそれがそうなんです。捨鉢じゃないんです。

「何がどうなってもいいよ。私はもはや本当の世界に入れられて、わが完成は主に在って必ず約束されてある。『栄光より栄光に至りて、ついにキリストの姿に化する』ことは、もはや間違いのないところである」

と。これはイエス・キリストの恩寵を無条件に受けとった人が持ち得るところの確信です。みな一人びとりが驚くべき人ですぞ。そういうようなところに入っていたきたい。

「どうも、あそここの集会にはあんなやつがいるから、私はもうあの集会に行くのは

いやだ」

とか、そんなことを言っていてはいかん。嫌な人がいようがいまいが、自分が行つて、そこを本当に光の世界に変えなくては。あなた方一人びとりがこの幕屋を全部背負っている。

「よし、引き受けたぞ」

というような実質が一人びとりの中にあつてこそ、幕屋は本当に展開していく。また、それは人を活かすところの本当の愛の生命ですから。愛の生命は、

「愛は一切に勝つ」

という。愛ほど力強いものはない。愛は人を救うものなんですから。

「愛する」

とは

「人を救う」

ということなんだ。救済するんです。人に本当の喜びを与える。

「人から喜びを何とかして得よう」

ではない。

そういうようなことになりまして、どうかひとつ、進みに進み、勇みに勇み、喜びに喜んで、行ってください。これは本当にバカ正直に受けるひとが、与えられるところの豊かな恩寵です。考えたり、思案したり、いろんなことをとやかくと思っている人は、段々ふさいでしまつて、とうとう終いには、

「もうよそう」

なんていうことになる。よして行く所はありはしない。この世的なところに。「行く」というのは、なにも私はこの集会のことを言っているのではない。

「キリストの中に行く」



ことです。

「このキリストを抜いて、いずこに行つて真の救いあらんや」

ということです。それだけ、何と言いますかね、説明のできない豊かな世界です。

●ウル・レリギオン

もう82歳のゲーテが彼の会話の一番終りのところに、

「宗教は、教会も結構ないろんなことをしてくださる。けれども……

ゲーテが

「ウル・レリギオン」

と言っている。これも「レリギオン」に「ウル」が付いている。元（源、原）宗教、この「ウル・レリギオン」の世界です。「レリギオン」は、

「神との交わり、結び付き」

という言葉です。結び付きの根源なる結び付き。ゲーテはこの「ウル・レリギオン」をここではそういうように説明はしてませんけれども、気持はそういうところにある。

……それは、特に選ばれた人たちはこのウル・レリギオンの世界に入つて、もはやい
ろんな宗派ではない」

とゲーテは言っている。

「教会のお助けもいらん」

というような角度でものを言っているところがある。けれども、それは「或る選ばれた人」と言うけれども、私に言われると、万人が本当は「ウル・レリギオン」に入れるんです。結局、数の上からは、「選ばれた人」みたいになつてしまふけれども、私はそう言わざるを得ない。あなた方一人ひとりとはみな、誰でもがこの「ウル・レリギオン」の世界に入れる。

内村先生が「無教会」と言つた角度はそちの角度だつただけけれども、残念ながら、無教会がこの聖霊の変貌の世界を大胆率直に受けとつていけない。だから、ダメです。この変貌の世界を大胆率直に受けとり、自分自身が驚くべき人になる。皆さんが、驚くべき喜びの人、生命の人、力の人、愛の人にされていく。それが本当の「ウル・レリギオン」の事態なんです。

●撰人

一番ダメなやつが実は選ばれる。パウロがロマ書9章以下でもつて「選び」のことを言っている。そして、「神の選び」をカルビンが「予定説」なんていう言葉で言ってますけれども。

神さまは本当に、この地上に救いをもたらせるために、実は——それ自身が価値があるからではないですよ。もうダメなやつでも、どんな仕方がないやつでも、神さまはそいつを捕まえては、そして、この救いを段々横にもつていく——そういった意味において選



れている。選ばれているのは、こつちが価値があるからではない。選ばれているのは、いよいよ他の人たちに救いをもたらさんがためである。もし、それをしないなら、この選びは、この人たちは本当に選ばれていないから脱落する。自分自身がダメになる。証し人にならない者はキリスト者ではないですよ。証し人にならないと。隣人に伝えていく、何らかの姿をもって隣人にこの福音を伝えていく人が、「撰人^{えらびひと}」というんです。みな「エホバの僕^{しもべ}、エホバの婢^{はしため}」です。その実は、今日学んだところのこの「メタモルフォーゼ」を、変貌を起こしている。日々に変貌を起こしている。

「エンテレケイア」「エンテレキー」というのは即ち、神の生命を「充滿してもつ」という素晴らしい言葉です。そして、これは『ファウスト』第二部にいくと、

「ファウストの霊は、ファウストの存在のエンテレケイアがこの地上の衣を捨てて、天界に救われていく」

と書いてある。即ち、文字通り、充滿してもつているところのキリストの生命をいただいて、そして、変貌また変貌して変わっていく。これが本当の生成です。

自分というものをしまっておくことではなくて、投げ出されていくところに生じていく世界です。死生の転換を常にやっていく。

今度は、そういった「純粹我」です。本当の純粹の我です。与えられたる「賜りたる我」です。この賜りたる我というものがもう自在に神の栄光体、キリストの栄光体として進んでまいります。

そういった意味において、9章のところを私たちは読みますと、なるほど、自分自身が幕屋であり、また、こうやってキリストを迎えている世界が幕屋であって、そしてしかも、

「彼らいたく懼れたれば」

とあるが、ペテロやヨハネやヤコブ以上ですよ、そんな驚きあわてているのではない。これは自分自身が驚きの世界に入って、自分が驚くべきものとされて、そして、いよいよ進んでまいります。我と我に驚いていくわけだ。

●爆発力

9 山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦^{よみが}えるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給う。

と、はつきりそこに書いてある。即ち、必ず甦えることをキリストは示されたから、

「それまでは言うな。秘義である、秘伝である。秘伝奥義でござるぞ」

というわけです。福音は公伝であるとともに、そういった秘伝的なものです。だから、お釈迦さんだってそうなんです。

「八万四千の法を説いたけれども、ひとつも説かなかった」

というその言葉は、



「本当は秘伝的なものだ。分かるかね」

というわけだ。公秘なんだね。公に誰でも万人に語られながら、また、それが本当に秘められたことである。そういうことなんですよ。

10 彼ら此の言を心にとめ『死人の中より甦える』とは、如何なる事ぞと互いに論じ合う。

ダメだよ、論じ合ったって。頭で論じ合ったってダメだ。頭の話し合いではダメなんだ。では、これは本当はどうしたらいいんですか。一緒に祈ったらいいい。一緒に祈って、キリストのその世界に自分たちをそうやって入れて、祈りのうちに「ははあ」ということになる。

11 斯てイエスに問いて言う『学者たちは、何故エリヤまず来るべしと言うか』
12 イエス言い給う『実にエリヤ先ず来りて、万の事をあらたむ。然らば人の子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の録されたるは何ぞや。』

これはイザヤ書53章をさしておられる。

「彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。」(イザヤ53・5)

「彼は悩みの人にして、苦しみを自ら受けて、また一切の人の不義ために碎かれて、我々に本当の安きを与う」

という。これが贖罪の十字架を負って、やがて——罪を贖われただけでも大変なことだが——生命を与えて、死んでも死なない生命をあたえる。喜びの人に。爆発力といえば、これほどの爆発力をもっているのはないです、クリスチャンの魂ほどの爆発力。もの凄い爆発力です。原子エネルギーどころのさわざではない。そういうエネルギーを我々の中にいただいている。そしたら、変貌せざるを得ない。

まあ、いろいろなものを読んだり、聞いたたりしてごらんよ。或るところまではごもつともなんだ。その先は、惜しいなあという。その先が、限界が突き抜けていないものだから、惜しいなあ。これは、キリストという具体的な生命そのものを、清らかなる愛そのものを受けとるまでは、自分を投げ出してこの世界に入るまでは。入ったらば、皆さん一人ひとり、光体ですよ。

「汝らは世の光なり」

「然り、そうです」

と。私たちは世の光ですと、何も言う必要はないけれども、本当にその光栄ある自覚が生じてくる。何となれば、変貌されていますから。光が、どしどし光の度が増していく。熱の度が増していく。では、今日はそこまで。

